

1. 調査目的等

中学校全学年・義務教育学校(7～9年)の生徒の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善及び進路指導に役立てる。

2. 学校ごとの指標

○標準学力分析検査におけるFスコア国語50、数学50以上を目指す。

3. 指標にむけての取組

「学力向上」を「本校の最重要課題」と捉え、昨年度の取組を継続発展し、以下の取組を行った。

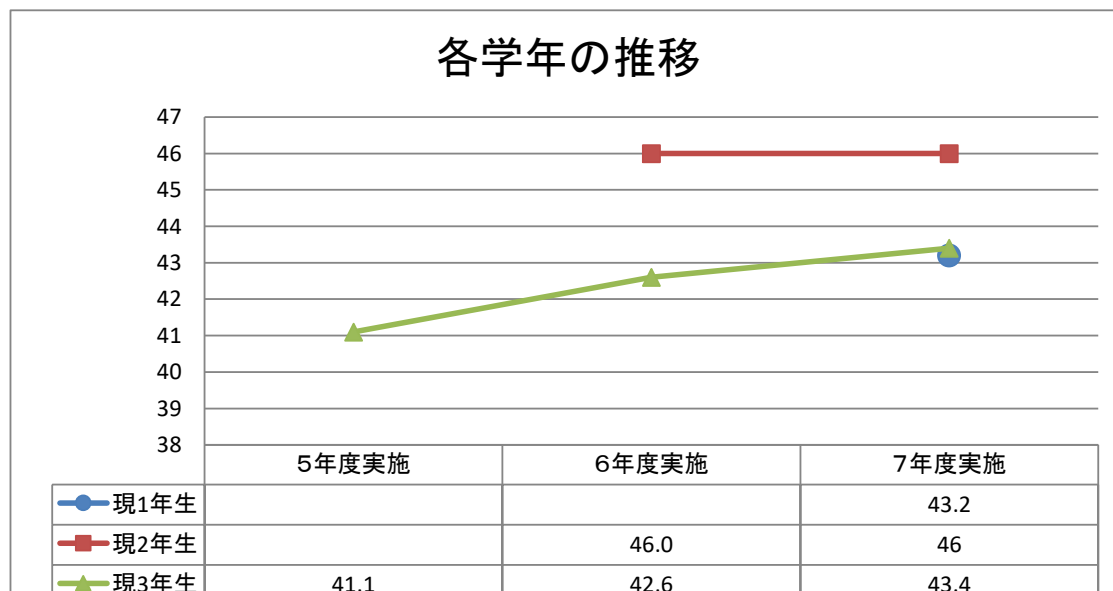
- ① 思考力・判断力・表現力等の向上のため、授業改善の取組を継続する。主題研修係が中心となり、全教職員一人最低一回の研究授業を行うなど組織的に取り組み、生徒の学力向上につなげる。
- ② 知識・技能の確実な定着のため、学力向上・保障推進委員会による組織的な学力向上の取組を行う。特にこれまで行ってきた取組を再度見直し、必要な取組を再構築する。具体的には、単元テスト及びその事後指導により指導と評価の一体化を目指すことを柱に、補充学習や稲東タイムの活用の仕方を学年ごとに見直す。また、ノースマホ・ゲームデーの取組等も継続して行っていく。
- ③ 学びに向かう力の向上のため、生徒指導委員会を中心に規範意識向上を目指す。生徒指導の四つの視点を生かした積極的生徒指導を行う。具体的には、児童生徒会を中心に児童生徒主体の活動や異学年交流など義務教育学校の特色を生かした個別最適及び協働的な学びを実現する。
- ④ ①～③の取組を推進するため、毎週木曜日に、会議や研修を行い、実態把握や取組の周知徹底に努める。また、7年次での県平均を目標に、理科に加え、英語科による乗入授業等、小中協働した取組を継続・発展させた。

4. 調査結果

※学校平均5年間の推移 (標準偏差値50に対して)

年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
本校(A)	45.7	44.1	42.4	44.7	44.2
嘉麻市(B)	47.1	46.0	45.5	45.8	45.8
(A)－(B)	-1.4	-1.9	-3.1	-1.1	-1.6
標準偏差値との差 (A)－(50)	-4.3	-5.9	-7.6	-5.3	-5.8

各学年の推移



5. 各学校における分析

- 9年生においては、7年次、8年次と徐々にではあるが、学力の伸びが見られている。授業スタンダードに基づいた授業づくりとして、めあてでの「問い」を通して、学習意欲のみならず思考力・判断力・表現力等が向上し見通しをもって学習活動に参加できたと考えられる。
- 8年生では、5教科の平均では大差は見られなかったが、教科間格差を見ると、数学において学力が向上したことが確認できた。稲東タイムでの小テストと80%合格率達成のための再テストを繰り返し実施することで、基礎基本の確実な定着が見られた。さらに、単元テストにおいても、入試問題を意識した思考力・判断力を高める問題で得点を得ることができ、点数アップにつながったといえる。
- 7年生においては、小中協働した取組として理科に加え、昨年度教科担任制を導入した英語で入学時点での結果が他教科と比べると向上していた。

6. 各学校における今後の取組

- 本年度1年間の取組を通して、R8年4月の各学年ごとに各教科ともFスコアプラス5ポイントを目指すために、
- ①単元テストにおいて教師が決めた合格ライン(65%~75%)を全員合格させるために、授業スタンダードに基づいた授業づくりと、反復学習によって全員を合格させる取組を行う。
 - ②ICT学習教材(タブドリ)を用いた基礎基本の徹底のため、各学年3教科において、授業等でITC教材を活用し、個別最適な学びの充実を図る。
 - ③稲東タイム(小テスト)での反復学習を通し、週末のテストで通過率80%全員合格を目指し、合格するまで繰り返しのテストを実施する。
 - ④ノースマホ・ノーゲームデーの達成率80%以上や家庭学習時間調査での各学年プラス10分達成率90%以上を目指し、期末考査前の学習はもちろん、日頃の家庭学習の取組を充実させるための課題を設定し、学びに向かう姿勢づくりを行う。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組



